

# 親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年によせて

2023(令和5)年にご法要をお迎えするにあたり、四夷法顕さんに連載いただいています。親鸞聖人御誕生の意義、立教開宗が示す意味を、一緒に味わわせていただきますよう。



## 立教開宗の年、「元仁元年」について

宗門の史料で初めて「立教開宗」という語が出るのは、明治九年に教部省という宗教行政をつかさどる当時の省庁に録呈された『宗規綱領』です。そこには、

宗祖親鸞年五十一、常陸国  
稲田ニ在テ、『無量寿経』ニ  
依テ浄土真宗ノ名ヲ立テ、  
『教行証文類』ヲ作ル。是ヲ  
立教開宗ノ本書トス。実ニ  
後堀河天皇元仁元年甲申  
ニシテ、師源空没後十三年  
ナリ。(『真宗史料集成』巻  
十一・三五二頁)

とあるように、親鸞聖人の主著『教行信証』は「元仁元年」(一二二四年)、聖人が五十二歳のときに撰述されたものとされ、真宗教団ではこの「元仁元年」を浄土真宗の立教開宗の年と定めています。

それは『教行信証』「化身土文類」に、釈尊が入滅されてから今日まで何年経っているかを算定し、今がまさしく末法の時代であることを表明するところに、「元仁元年」という

年号が出てくるためです。

しかし、果たして『教行信証』が「元仁元年」に撰述されたのかといえ、実際はそう簡単には決められません。それは聖人の他の著作には、ほとんど終わりに撰述年時が明記されていますが、『教行信証』にはそれがなく、「元仁元年」は撰述年時として記されているわけではないからです。

さらに聖人の筆跡研究の進展により、少なくとも『教行信証』の完成は、「元仁元年」よりも後であることが確実になってきました。おそらくその撰述は「元仁元年」を含む数年間に原形が整えられ、それをベースに清書したのち何度も推敲を重ね、さらに大幅な改訂を経て、門弟の尊蓮へ書写を許された七十五歳頃に一応は完成したとみるべきであろうとされます(推敲は八十歳以降も重ねています)。そうすると、「元仁元年」という年号がいかなる意味をもつのかを考える必要が出てきます。これについても様々な

説がありますが、「元仁元年」は師・法然聖人の十三回忌の年で、当時の仏教界から二回忌の念仏禁制が出された年にあたり、つまり「元仁元年」とは、親鸞聖人がお念仏の教えの正当性を当時の仏教界に主張するために、『教行信証』を撰述せずにおれなかった動機の一つを示す年号であったといえます。

前回(二一四号)、親鸞聖人には立教開宗の意図はなかったことを述べましたが、その意味からすれば「元仁元年」が立教開宗の年とされるのは、あくまで後世の設定によるものです。しかしその元は、親鸞聖人が自身をお念仏の道へと導いてくださった阿弥陀如来の仏恩、法然聖人の師恩に報いるために思い立たれた年号だったのです。

立教開宗八百年をお迎えするにあたり、私たちはそのことを忘れてはならないと思います。

龍谷大学・相愛大学 非常勤講師  
阪神西組 信行寺住職

四夷法顕